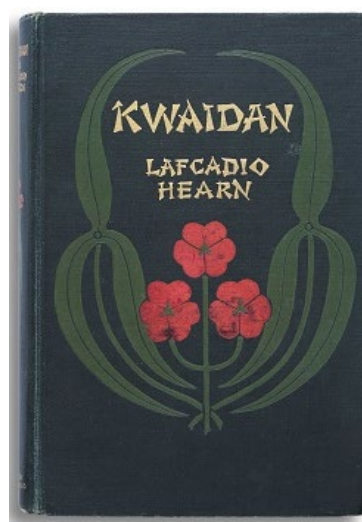
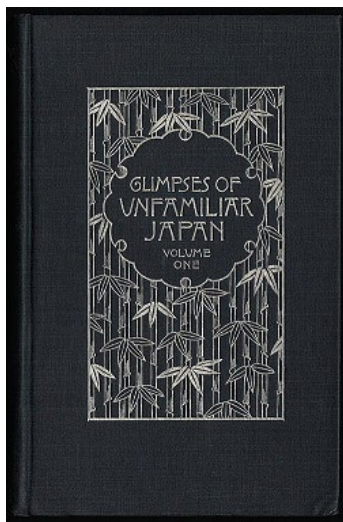


ヘルン先生と四高教授になった教え子たち

Shiko-no-Mori Exhibition "Lafcadio Hearn and His Former Students Who Taught at the Fourth Higher School"

会期：2026 年 1 月 13 日(火)～3 月 27 日(金) 場所：中央図書館「思考の森」展示コーナー

明治期に英語・英文学の教師として活躍する傍ら日本文化を研究・紹介し、「小泉八雲」として日本に帰化したラフカディオ・ハーン(1850～1905)。八雲は来日直後から「ヘルン先生」として教え子たちに親しまれ、八雲自身もそれを喜んでいました。八雲については、松江、熊本、東京で活躍したイメージがありますが、実は金沢大学の前身の一つ第四高等学校(四高)の教授の中にも、その教え子が複数名いました。大谷正信(おおたに まさのぶ)、田部隆次(たなべ りゅうじ)、岸 重次(きし しげつぐ)…それぞれにヘルン先生の業績や蔵書を後世に伝えるために大きな貢献をしています。本展では、附属図書館所蔵資料を通して八雲と教え子たちのつながりを紹介します。



小泉八雲の代表作

【左】Glimpses of unfamiliar Japan (日本の面影) / Lafcadio Hearn. Boston : Houghton Mifflin, c1894

【右】Kwaidan : stories and studies of strange things (怪談) / Lafcadio Hearn. Boston : Houghton, Mifflin, 1904

【展示資料解説】

展示ケース1 『日本の面影』の中の大谷正信と「八雲全集」の刊行

#1 Ko-ji-ki or Records of Ancient Matters (古事記) / translated by Basil Hall Chamberlain. The Asiatic Society of Japan, 1906【四高蔵書】

東京帝国大学の英語教師として長く日本に滞在し、小泉八雲とも親交のあったバジル・ホール・チェンバレンが訳した『英訳古事記』。この本を読んだことが八雲来日のきっかけとなった。また「八雲」の名前については古事記に出てくる、スサノヲノミコトが、妻クシナダヒメを伴って、出雲国の須賀という土地に宮を建てたときの次の歌(和歌の始祖となった歌)がもとになっている。

「八雲立つ 出雲八重垣 妻ごみに 八重垣つくる その八重垣を (幾重にも出雲の雲をめぐ

らして垣と成し、妻をその中に置こう)」解説ページ <https://www.nijl.ac.jp/koten/kokubun1000/1000iwata.html>

展示本は八雲が実際に読んだものと同じ版で 1906 年に再版されたものである。ちなみに富山大学附属図書館のヘルン文庫では、八雲の直筆の書き込みがされたこの本を所蔵している。チェンバレンの蔵書・書簡等については、愛知教育大学附属図書館の「チェンバレン・杉浦文庫」で所蔵している。



※富山大学学術情報リポジトリ ToRepo で全文閲覧可 <http://hdl.handle.net/10110/00020056>

#2 Glimpses of unfamiliar Japan (日本の面影) / Lafcadio Hearn. Houghton Mifflin, c1894 (初版)【四高蔵書】

小泉八雲が来日後初めて著した紀行文。来日当日の 1890 年 4 月 4 日から、松江を去る 1891 年 11 月 15 日までの 1 年 7 ヶ月の出雲地方と松江でのエピソードを 2 巻 27 編に分けて英語で描いた大作。日本では『日本の面影』の訳名で知られる八雲の代表作の一つ。八雲が松江を離れる最終章「Sayonara」には大谷正信（後に四高教授）による生徒代表としての挨拶が収録されている。



※Internet Archive で全文閲覧可 <https://archive.org/details/glimpsesofunfami01hear/mode/2up>

展示パネルでは、次の文献も使っています。Glimpses of unfamiliar Japan (The writings of Lafcadio Hearn : in sixteen volumes v. 6) . Houghton Mifflin, c1922 (八雲の没後刊行された 16 巻からなる著作集)

『日本の面影』の章立て ※各章のタイトルの日本語訳は池田雅之氏による

【上】東洋の第一日目/弘法大師の書/地蔵/鎌倉・江ノ島詣で/盆市/盆踊り/神々の国の首都/杵築ー日本最古の神社/子供たちの死霊の岩屋で：加賀の潜戸/美保関にて/杵築雑記/日御崎にて/心中/八重垣神社/狐

【下】日本の庭にて/日本の祭壇/女性の髪形について/英語教師の日記から/二つの珍しい祭日/日本海に沿って/舞妓/伯耆から隠岐へ/魂について/幽霊と化け物/日本人の微笑/さようなら

#3 小泉八雲全集 第 3 巻 / 小泉八雲著；落合貞三郎、大谷正信、田部隆次 訳. 第一書房, 1926(大正 15)年【四高蔵書】

17 巻＋別冊からなる小泉八雲の著作を集めた全集。後に四高教授となった大谷正信、田部隆次などを含む教え子たちが中心となって翻訳・発行した豪華本。第 3 巻は『日本の面影（この全集での訳名は「知られぬ日本の面影」）』の巻で、大谷、田部、落合貞三郎が分担して翻訳している。

※国立国会図書館デジタルコレクションで全文閲覧可

<https://dl.ndl.go.jp/pid/3430169/1/4>



展示ケース 2 岸重次による八雲の東京帝大講義受講ノート

#5 帝国大学講義受講ノート : Special Lectures on English Literature / 岸重次記録, 1901 (明治 34) ～ 1902 (明治 35) 年【特別資料室蔵】

岸重次（きししげつぐ、後に四高教授）が帝国大学英文科在学中に記した 8 冊の講義受講ノートのうちの赤表紙の 2 冊。展示資料は、小泉八雲による標記の講義の記録である。八雲は簡単なメモを時々見ながらゆっくりとした口調で口述し、学生がノートを取りやすいように、改行箇所や句読点を指示していたと言われている。

#6 帝国大学講義受講ノート : History of English Literature / 岸重次記録, 1900 (明治 33) ～1902 (明治 35) 年【特別資料室蔵】

岸重次が帝国大学英文科在学中に記した 8 冊の受講ノート中の黒表紙の 3 冊。小泉八雲の帝国大学での最後の講義の記録。展示パネルは、八雲の後任の夏目漱石による最初の講義録の一部。流麗に記された八雲の講義の受講ノートと比較すると判読し難いものになっている。

※岸重次による受講ノートに関する参考文献

- 上田正行「ハーンの帝大解任の事情：漱石を視野に入れつつ」金沢大学文学部論集. 文学科篇 10、pp.1-12、1990 年 <http://hdl.handle.net/2297/5212>
- 梶井重明「夏目漱石の東大最初の講義録岸重次のハーン講義受講ノートの中より発見」こだま：金沢大学附属図書館報 139、pp.6-7、2000 年 <http://hdl.handle.net/2297/3041>

#7 帝国大学一覧（明治 30～31 年） / 帝国大学, 1897（明治 30）年【特別資料室蔵】

小泉八雲が講師として在籍していた頃の、帝国大学文科大学の教授及教師名のページの抜粋。

※国立国会図書館デジタルで全文閲覧可 <https://dl.ndl.go.jp/pid/813172/1/301>



展示ケース 3 田部隆次が書いた八雲の伝記／駒井徳太郎の手紙

#9 小泉八雲：ラフカディオ・ヘルン / 田部隆次著. 早稲田大学出版部, 1914（大正 3）年【四高蔵書】

小泉八雲の帝国大学時代の教え子、田部隆次（たなべりゅうじ、後に四高教授）が執筆した八雲の伝記。

第 11 章は妻・セツによる「思い出の記」。序は四高で田部の同僚だった西田幾多郎が書いている。田部は後に、兄・南日恒太郎（なんにちつねたろう；当時富山高校・初代校長）と共に八雲の蔵書を遺族から購入。富山高等学校（現・富山大学）図書館に「ヘルン文庫」を作った。

※国立国会図書館デジタルコレクションで閲覧可 <https://dl.ndl.go.jp/pid/950739/1/3>



#10 三々塾生写真 1907(明治 40)年 6 月頃撮影【金沢大学資料館蔵】

三々塾（四高公認の下宿。命名は西田幾多郎）生の卒業を記念して撮影された集合写真。中列右から 2 番目が西田幾多郎。後列左から 2 番目の田部隆次、中列の一番左の茨木清次郎はともに英語教師で、小泉八雲の帝大時代の教え子。その他、卒業生の河合良成（中列左から 3 番目）なども写っている。

※金沢大学デジタル・アーカイブ KUDA でも閲覧可 <https://kuda.repo.nii.ac.jp/records/2002151>



#11 梶井幹生「駒井徳太郎の小泉八雲宛書簡」. へるん 第 36 号 p.119 1999 年

1900（明治 33）年 6 月 11 日、当時帝国大学文科大学漢学科専攻に在籍していた駒井徳太郎（後に四高教授）が卒業を前に小泉八雲に英文で送った手紙。展示資料は後に雑誌に掲載されたもの。

#12 駒井徳太郎宛ての Lafcadio Hearn の手紙. 英文学研究 第 11 巻 p.144 1931 年

1900（明治 33）年 6 月 11 日、駒井徳太郎が小泉八雲に送った書簡に対する八雲からの返信が雑誌に掲載されたもの。八雲は 6 月 16 日に早速、卒業する駒井の将来の活躍を期待する内容の手紙を送っている。

今回の展示については次の文献を参考に企画しました。あわせてお読みください。

- 染村絢子「小泉八雲と周囲の人々」 金沢大学資料館紀要第 2 号 pp.7-47、2001 年
<https://kanazawa-u.repo.nii.ac.jp/records/31727>
- 池田雅之著『小泉八雲 日本の面影（NHK「100 分 de 名著」ボックス）』NHK 出版、2016 年
- 銭本健二、小泉凡著『八雲の五十四年：松江からみた人と文学』松江今井書店、2003 年
- 田部隆次『小泉八雲：ラフカディオ・ヘルン（中公文庫）』中央公論新社、2025 年



もっと知りたい人は…ヘルン文庫（富山大学附属図書館）に行ってみよう。

小泉八雲の旧蔵書（洋書 2,069 冊、和漢書 364 冊）及び「日本：一つの解明」（「神國日本」）の手書き原稿上下 2 冊 1,200 枚からなるコレクション。八雲の文筆活動や講義に、直接または間接的に影響を与えた資料群で、そのジャンルは、欧米の文学作品、神話・民間伝承、歴史、哲学・宗教、東洋関係、自然科学等、多岐にわたっている。

https://www.lib.u-toyama.ac.jp/chuo/hearn/hearn_index.html



小泉八雲 略年譜

年	年齢	場所	出来事	給料
1850	0	ギリシャ	6月27日 ギリシャのレフカダでアイルランド人の父をギリシャ人の母の次男として生まれる。名はパトリック・ラフカディオ・ハーン (Patrick Lafcadio Hearn)	
1852	2	アイルランド	父の故郷アイルランドのダブリンに母と移住。その後、父母の離婚、病気の母との別れ(その後、大叔母が養育)など苦難の時代が続く	
1863	13	英国	英国ダラム市郊外のカトリック神学校に入学	
1866	16		学校で遊戯中に左目を怪我、失明	
1867	17		養育者の大叔母の破産。神学校を中退(以後就学せず)	
1869	19	アメリカ	親戚を頼って移民船でニューヨーク、その後シンシナティへ。さらに色々な職を転々	
1878	28		ニュー・オーリンズへ。雑誌社の副編集長、文芸部長に	
1882	32		生涯を通じての心の恋人 E.ピスランドと出会う。この頃から東洋への関心を高める	
1883	33		ハーパー社との関係が始まり、来日のきっかけとなる	
1887	37	マルティニーク	西インド諸島の仏領マルティニーク島に2年間滞在し伝説や歌を収集、執筆活動う。この頃、P・ローエル著『NOTO』(東京から能登半島までの紀行文)を読む	
1890	40	松江	4月 雑誌特派員として来日 8月 島根県尋常中学校、同師範学校の英語教師として赴任	100円/月
1891	41		1月 風邪をこじらせ、小泉セツが雇われる。6月からはセツと同居	
		熊本	11月 第五高等学校教師になる	200円/月
1893	43		セツの懐妊を知り、帰化を考える。11月 長男・一雄誕生	
1894	44		日本に関する最初の著書『日本の面影』(全2巻)を出版	
		神戸	10月 第五高等学校を辞し、神戸クロニクル社に転じる	100円/月
1896	46		帰化手続きが完了し「小泉八雲」と改名(セツ夫人の戸籍に入籍)	
		東京	9月 帝国大学(東京帝国大学)講師	400→450円/月
1897	47		2月 次男・巖 誕生	
1899	49		12月 三男・清 誕生	
1900	50		東京帝大文科大学長の外山正一(とやま まさかず;大学での理解者)没	
1903	53		1月 解雇通知を受け取る。その後、学生たちの留任運動が起こる。 3月 東京帝大を退官 9月 長女・寿々子誕生	
1904	54		3月 早稲田大学文学科講師 4月 『KWAIDAN(怪談)』出版 9月26日 心臓発作のため急逝	

(注)以下を元に作成 1)池田雅之『小泉八雲 日本の面影』(NHK「100分de名著」ブックス)NHK出版、2016年
2)染村絢子「小泉八雲と周囲の人々」金沢大学資料館紀要第2号 pp.7-47、2001年